口者言語所由出飲食所由入也、

直指方云、熱則口苦、寒則鹹、宿食則酸、煩燥則澀、虛則淡、疸則甘、臙氣偏勝、則其味必偏、

口臭、是胃火食鬱也、　喉腥、是肺火痰滯也、

口脣邊曰吻（クチヅキ）　脣上鼻下溝曰人中（詳于鼻之條下）　寒閉口曰噤（ツクム音禁、訓豆久無）　口戾不正曰咼（ユカム）

〔身のかたみ〕第六、御口はひろくも、せばくも、ものいひしどけなく、口のわきよりあはかきたらし、おかしきことありとて、口ひろくあきて、舌のさきひろめき、咽の穴殘りなくみえなどしては、いかにその口つきよしとても見にくゝ候へば、うけ口、すけ口、わに口などとて、なをえたるあしきくちつきなりとも、こはひきにうちやすらひて、のどかにものいひたらんは、いかばかりきゝよく見能候はんずらん、人ごとにわれのみはあしと思ひ候はねども、かたはらにて見る人の、いひさたするにつけても、かほのもちやう、ものゝいひやう、その品々ゑらるゝものにて候、又いかに上らうと申候へども、はなのさきまがりて、ゑみがたくほうげづきたるは見にくし、さしてなき人なりとも、うちゑみ御あひしらひ候はゞ、あしき御くちつきもつみゆるされ候べく候、

〔源氏物語七紅葉賀〕はしのかたについ居て、こちやとの給へど、おどろかず、入ぬるいそのとくちずさびて、口おほひし給へるさまいみゑうざれてうつくし、あなにくゝかゝることくちなれ給にけりなみるめにあくはまさなきことぞよとて、人めしで、御琴どりよせてひかせ奉り給ふ、

〔枕草子二〕にくきもの

さけのみて、あかきくちをさぐり、ひげあるものはそれをなでゝ、さかづき人にとらするほどのけしき、いみじくにくしとみゆ、又のめなどいふなるべし、身ぶるひをし、かしらふり、くちわきをさへひきたれて、わらはべのこうどのにまゐりて、などうたふやうにする、略○下

〔枕草子三〕わかき人々はたゝいひにくみ、見ぐるしきことどもなどつくろはずいふに、此きみ藤○